

## ギヤスケルのなかのテニスン

——『クランフォード』第三章、第四章の注釈として

長 浜 麻里子

ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) は、ユーグロウが指摘しているように「生涯、趣味として多くの詩を読み続け、彼女の小説の題辞は彼女が当時の詩人をよく知っていたことを示している」(42)。当時の詩人とは、クラブ、ワーズワス、コールリッジ、サウジー、バイロン、テニスンなどであるが、彼女は16、17世紀のバラッド、シェイクスピア、スペンサー、18世紀のトムスン、グレイ、クーパー、サミュエル・ジョンソンなども読んでおり、<sup>1</sup>題辞のみならず小説の中には多くの詩がたびたび引用されている。

本稿では、初期の小説『クランフォード』(Cranford, 1851-53) において引用されるテニスンの詩に注目したい。小説の主人公ミス・マティは姉のミス・デボラ亡き後、昔の恋人ミスター・ホルブルックに再会し、招待を受けて彼の家を訪問する。実直で力強いヨーマンとして生き、独身を貫いてきた彼がかつての恋人に朗読するのがテニスンの詩である。ロマンスの場面で引用されるテニスンの詩は田園風景のなかで語られる昔の恋人の語りを美しく演出する要素になっているだけでなく、彼の詩の朗読はミス・マティへの変わらぬ真摯な愛の告白—もちろん随所に、クランフォード的ユーモアと可笑しみが伴うが—として読むことができる。若い頃、身分違いと拒絶され、牧師の娘であったマティとの結婚を諦めたミスター・ホルブルックの苦悩は、彼自身の言葉で表現されることはなくテニスンの詩句のなかに秘められている。彼はマティとの再会後、パリに旅立ち、帰国後亡くなるが、なぜ旅に出るのかという理由も彼の言葉で語られることはない。彼の想いは引用されるテニスンの詩に注意を払うことで明らかになる。つまり、ミスター・ホルブルックという人物の内面は引用されるテニスンの詩に重ねることができ、テニスンの詩はこの登場人物の人物像に深く関わっていると考えられるのである。

ヴィクトリア朝を代表する詩人テニスン (Alfred Tennyson, 1802-92) は、1832年、34年に出版した詩集ですでに完成した作風を示し、1850年に代表作『イン・メモリアム』(In Memoriam) を出版、同年ワーズワスが没した後、桂冠詩人となった。彼は小説が一般的な文学形式となっていた時代において、きわめて広範な読者を得ていた詩人であり (Evans 99)、その詩の「流麗な韻律と的確

な自然描写の結合は、この上なく美しい」(海老池 207) と言われる。1859年『国王牧歌』(*The Idylls of the King*) を上梓し名声を確立したとされるが、1864年に出版された『イーノック・アーデン』(*Enoch Arden*) がギヤスケルの後期の小説『シルヴィアの恋人たち』(*Sylvia's Lovers*, 1863) と同じ愛の自己犠牲—愛する人の幸せを思うがゆえに自分の帰還を知らせず痛ましい結末を迎える男の悲劇—というテーマを扱っていることは注目に値する。両作品についての論考はここでは省くが、『クランフォード』のミス・マティとミスター・ホルブルックの恋物語も当人たちにとっては理不尽ともいえる理由で純粋な愛を断たれた男女の悲劇である。身分違いという階級意識に従わざるを得なかったロマンスの主人公たちの別離と悲哀—その男女の内面をギヤスケルはどのように捉えているのか。本稿では小説のなかで描かれるヨーマンの社会的地位や暮らしぶりにも注意を払い、ヴィクトリア朝中葉の階級意識について理解を深めながら考察したい。

## I 田園生活を背景に語られるロマンスの主人公

『クランフォード』で語られる昔のロマンスは30余年前の話であり、ミスター・ホルブルックは70歳、ミス・マティは52歳近くになっている。彼はマティに求婚して以来、クランフォードに来なくなっていたが、ミス・デボラが亡くなると町にやって来てマティに再会する(第三章)。数日後、家に招待したいとの手紙が彼から届き、ミス・マティ、ミス・ポール、語り手メアリの三人は初夏の六月、彼の家を訪問し、美しい田園地帯でヨーマンとして生きるミスター・ホルブルックに温かく迎えられる(第四章)。

Woodley stood among fields; and there was an old-fashioned garden where roses and currant-bushes touched each other, and where the feathery asparagus formed a pretty background to the pinks and gilly-flowers; there was no drive up to the door. We got out at a little gate, and walked up a straight box-edged path. (32)

田舎町クランフォードから3、4マイル離れたウッドリーに土地屋敷を持つミスター・ホルブルックの暮らしぶりは、裕福というよりむしろ質素でつつましいものである。しかし、初期のギヤスケルの作品に描かれることの多かった労働者階級の人々の困窮した暮らし向きに比べれば、はるかに豊かでゆとりある生活をしていると言えるだろう。彼が日々仕事に向かっていた様子は手入れの

行き届いた菜園や生け垣に表れている。ウッドリーはギヤスケルの母の実家であったサンドルブリッジ・ファームを舞台にしており、ミスター・ホルブルックのモデルは母方の祖父である（Ibuki 186）とされている。少女時代を美しい自然の中で暮らしたギヤスケルは、自然をこよなく愛し、自然の持つ力を熟知していた。そうした田園生活のすばらしさ、自然への賛嘆の言葉はミスター・ホルブルックを通して語られる。

ミス・マティとミス・ポールが屋敷内で小休憩している間、メアリはミスター・ホルブルックと庭を散策する。彼は歩きながら、その場にふさわしい詩の一節を引用してメア리를感心させる。このとき彼が唱えるのはシェイクスピア、ジョージ・ハーバートからバイロン、ゲーテに至る時代も国も異なる詩の一節である。単語の読み方に間違いはあるが、語られる詩句は朗々としており、彼は高度な教育は受けてはいないが生活に深く根付いた教養を持ち、「毎日毎年の季節の美しさの移り変わりに喜びを見出す人」(32) として描かれる。屋敷の暖炉脇には檜の木の調理台や食器棚が並び小さなトルコ絨毯が敷かれた食堂らしき部屋があり、その先に客間が続いている。

The room in which we were expected to sit was a stiffly-furnished, ugly apartment; but that in which we did sit was what Mr Holbrook called the counting-house, where he paid his labourers their weekly wages at a great desk near the door. The rest of the pretty sitting-room—looking into the orchard, and all covered over with dancing tree-shadows—was filled with books. They lay on the ground, they covered the walls, they strewed the table. (33)

「趣味の悪い」(“ugly”) 客間とは女性客のために女中が当代風にしつらえた部屋を揶揄した語り手メアリの表現であるが、克蘭フォードの女たちが気に入ったのは実務を兼ねたミスター・ホルブルックの居間の方で、その「素敵な」(“pretty”)居間には多様な本が収集されている。実際、サンドルブリッジ・ファームや親戚の家には広範囲の蔵書があり、ギヤスケルは娘時代から気に入った本を自由に読んでいた（Uglow 41）というから、これも作家の記憶の反映であり、当時のヨーマンはそのような生活をしていたのであろう。

ミスター・ホルブルックは菜園と果樹園のほかに、牝牛26頭を世話しており、賃金農民労働者と女中を雇い、何不自由のない生活をしている。昔ながらの生活を守るミスター・ホルブルックの堅牢で飾り気のない生活態度は食事の場面にも表れている。彼はグリンピースを先の丸いナイフの上のにのせて一気に口に放り込むのだが、これは上品なマナーを気にする年配の女性たちには真似ので

きない所作であり、彼の気取りのなさは豪快で愉快な一場面になっている。食事の後、女だけになったところでミス・マティは次のように語る。

“It is very pleasant dining with a bachelor,” said Miss Matty softly, as we settled ourselves in the counting-house. “I only hope it is not improper; so many pleasant things are!” “What a number of books he has!” said Miss Pole, looking round the room. “And how dusty they are!” “I think it must be like one of the great Dr Johnson’s rooms,” said Miss Matty. “What a superior man your cousin must be!” (32)

彼女は控えめに「独身男性との食事はとても楽しいわね」と話して、昔の恋人の暮らしぶり与人柄に心地良さと敬意を示している。「夏は屋敷の扉を開けっ放しにしていた」(30) というから、居間の埃は農作業の出入りや果樹園から自然に入り込む土埃であろう。ミスター・ホルブルックの屋敷には素朴な生のリズムがある。労働と休息、そして関心の赴くままに収集される蔵書の数々。農業と知的生活の融合はミスター・ホルブルックの生活の実態を示している。彼の読書に対するミス・マティの敬意は、姉が称えていたジョンソン博士を引用することで表現されるが、これは生活の規律や物事の判断を姉に委ねていたミス・マティの性質を表すとともに、彼女が無意識下で昔の恋人について姉の賛同を求めているようにも見える。

食後、ミスター・ホルブルックは女たちを散歩に誘うが、年配の女二人は服が汚れるなどを気にして断り、メアリだけが同伴する。田園を歩きながら、彼は再び詩を口ずさむが、このとき唱えたテニスを彼は熱烈に称賛する。そして、家に戻るとテニスの『ロックスリー・ホール』(*Locksley Hall*, 1842) を朗読すると言ってきかない。

## II テニスの詩の意味

まず、ミスター・ホルブルックが屋敷の杉の木の前で唱えた詩句「杉はいく層にも重なる深緑の陰を広げ」(35) はテニスの初期の詩集『庭師の娘』(*The Gardener's Daughter*, 1842) の一節である (Birch 204; Ibuki 189)。何気ない自然描写だが、それに続く「三月のトネリコのつぼみより黒く」(36) も同じ詩集の「…その瞳を／ヒナギクの色濃きよりもさらに色濃く／その髪を三月初めのトネリコのつぼみよりもさらに黒々とさせて」からの一節である (Birch 204; Ibuki 190) ことから、ここでミスター・ホルブルックは自然のなかに愛する人の面

影を見ていたことが明らかになる。つまり、ミスター・ホルブルックはテニスンの詩を通して杉の老木に自らの姿と時の経過を、ヒナギクやトネリコの可憐な花やつぼみに若き日のミス・マティの面影を投影しているのである。詩が現実の昇華であるとするならば、田園自然を瑞々しく詠うテニスンの詩は恋に破れたミスター・ホルブルックの心を癒やしたことであろう。

しかし、テニスンの自然観察眼と的確な自然描写に対する彼の賛辞は次第に熱を帯び、メアリを困惑させる。彼は女たちに『ロックスリー・ホール』を朗読することを決意するのだが、『ロックスリー・ホール』には『庭師の娘』のような牧歌的要素はない。もっと正確に言えば、『ロックスリー・ホール』は田園自然を背景とした春の甘い青春の恋から始まるが、この詩は恋人が別の男と結婚する苦悩、女性と相手の男への侮蔑、娘を別の男に嫁がせる彼女の父親への皮肉と反発を赤裸々に告白するものである。若者の理想主義は階級、戦争、社会批判に至り、彼は失意と意気消沈のなかでロックスリー・ホールの海辺をさまよい、英知を求め、最終的にはロックスリー・ホールを立ち去ることになる。

『ロックスリー・ホール』は強弱八歩格のカプレットで綴られた全194行の物語詩である。テニスンによれば、これは「劇的なモノローグ」であり「若者の青さ、その長所と欠点、そして憧れ」を表している (Hill 94)。また、『ロックスリー・ホール』は架空の場所であり、主人公も想像上の人物である」としているが、舞台はテニスンが生まれたリンカンシャの海岸であり、詩には相愛の仲であったローザ・ベアリングとの関係が彼女の両親によって阻止されたという事実が反映されている (Hill 95)。ローザは裕福な旧家の身分にふさわしい家柄に嫁ぎ、この詩が執筆された当時のテニスンはケンブリッジ大学を中退し、未だ詩人としての地位を確立していない田舎の牧師の息子であった (西前 118-9)。『ロックスリー・ホール』に表明されるのは身分違いを理由に恋人への一途な愛を断たれた若者の悲嘆である。ローザに関連する作品は4篇あり『庭師の娘』はその一つであることから (西前 119)、『クランフォード』における『ロックスリー・ホール』朗読の場面は、このようなテニスンの作品を重層させて語られるミスター・ホルブルックの内面告白であると言ってよいだろう。

『ロックスリー・ホール』を見てみよう。この詩の主人公は何世紀にもわたって実り多き豊かな土地を受け継いできた農村の若者である。彼は未来に夢を持ち、広大な宇宙の星々に自らの前途を重ねて見ている。春、若者の心は恋に目覚め、恋人と相思相愛の関係になるが、二人の愛は彼女の父親によって阻止される。自己を否定された若者は侮辱の言葉を吐き出す。

Is it well to wish thee happy?—having known me—to decline  
On a range of lower feelings and a narrower heart than mine! (ll. 43-44)

あなたの幸せを願うのは良いことだろうか?—僕を知っているのに—断るとは僕よりも程度の低い感情や狭い心のために!

別の男を選んだ女性に対する若者の言葉は激しい。彼の激しい怒りは相手の男やその子どもにも及び、呪いの言葉は社会批判へと至る。

Cursed be the social wants that sin against the strength of youth!  
Cursed be the social lies that warp us from the living truth! (ll. 59-60)

若者の力に対して不仕付けな社会的欲望は呪われるがいい!  
生きた真実から僕らを歪める社会の嘘など呪われるがいい!

オックスフォード版『クランフォード』の注には上記2行が示され、これは愛する女性と社会的理由で結婚できなかったミスター・ホルブルックの怒りの表明であると付記されている。しかし、ロックスリー・ホールの若者はさらに次のように語っている。

Well—'t is well that I should bluster!—Hadst thou less unworthy proved—  
Would to God—for I had loved thee more than ever wife was loved.

Am I mad, that I should cherish that which bears but bitter fruit?  
I will pluck it from my bosom, tho' my heart be at the root. (ll. 63-66)

そうだ—怒鳴りつけるのは当然だ!—あなたに価値がないと証明されていたら—  
神にそう願う—なぜなら僕は妻となる誰よりもあなたを愛していたから。

僕は狂っているのか? 苦い果実しか実らないものを大切にしなければならないとは  
僕は胸から苦い果実を摘み取るだろう、僕の心はその根元にあるのだから。

これは独身を通すミスター・ホルブルックの場合、ミス・マティへの愛の告白となるのではないだろうか。失意のなかで若者は自然の中に慰めを求め、労働の中に何か新しい収穫を見出そうとする。しかし世には戦争が起り社会秩序

は悪化する。若者は懊悩たる物思いに沈み、ロックスリー・ホールの海辺をさまよう。

Knowledge comes, but wisdom lingers, and I linger on the shore,  
And the individual withers, and the world is more and more.

Knowledge comes, but wisdom lingers, and he bears a laden breast,  
Full of sad experience, moving toward the stillness of his rest. (ll. 141-44)

知識は得られるが、英知はなかなか得られない、そして私は海辺をさまよう  
すると一人ひとりの人間は消えていき、世界がますます大きくなる。

知識は得られるが、英知はなかなか得られない、そして人は悲しい体験にみちた  
鉛の胸に耐え、安息の静けさに向かって進んでいくのだ。

若者は蒸気船や鉄道など科学の確かな前進を望む一方で、未開の地もしくは太古の泉にありたいと空想する。彼はついに過去を断絶し、ロックスリー・ホールを出ていくことを決意する。

Let it fall on Locksley Hall, with rain or hail, or fire or snow;  
For the mighty wind arises, roaring seaward, and I go. (ll. 193-94)

雨でも雹でも火でも雪でもロックスリー・ホールに降り注ぐがいい、  
強い風が立ち上がり、海に向かって轟音を立て、そして僕は出て行くのだから。

以上、内容説明のため引用が長くなったが、『ロックスリー・ホール』はこのように激しく赤裸々なモノローグであり、見方によっては若者の空想的理想主義による厭世的で支離滅裂な詩行であるとも言えるかもしれない。事実、『ロックスリー・ホール』の批評には賛否両論があり、否定的な批評には『ロックスリー・ホール』の主人公に狂気を示唆するものもある（西前 102-3）。

ギヤスケルは『クランフォード』のなかに『ロックスリー・ホール』という実際の詩集名を示しているものの、その詩句は一言も引用していない。さらに、小説の主人公ミス・マティはミスター・ホルブルックの詩の朗読が始まって5分もしないうちに居眠りを始め、付き添いのミス・ポールもかぎ編の編目を数えることに集中していて聞いていない。クランフォードの女たちの耳に『ロッ



クスリー・ホール』の言葉は届いていないのである。女たちを前に詩を朗誦するミスター・ホルブルックの姿は、無音の映像となり、物語の遠景として描かれているにすぎない。

### Ⅲ テニス愛読者としてのミスター・ホルブルック

『クランフォード』において名家の独身女性は結婚するにふさわしい紳士階級の男性不在にあって、日々儉約に努め、工夫を凝らして上品さを保たなければならぬ。彼女たちの生活信条は「上品なつつましさ」(“elegant economy”)(4)にある。彼女たちは現実(現状)を受け入れ、お互いの貧しさは見ないふりをする「団体精神」(“esprit de corps”)(4)を持ち助け合っている。そこにユーモアと可笑しみが漂うのが『クランフォード』であるが、女たちは古い習慣を守り、規則正しく、善良である。このような女性たちに、若者の現実離れた理想主義や空想、悲壮な情熱、深刻な内面告白はそぐわない。この点を考えると、ギaskellは『クランフォード』のユーモラスで牧歌的な基調を維持したまま、当時広く読まれていたテニスの詩集を挙げることでミスター・ホルブルックの積年の苦悩と純愛をきわめて巧みに読者に暗示していると言えるだろう。

一方で、ギaskellはテニスの『ロックスリー・ホール』を通して、純粋な愛を断たれた若者の内面を洞察し、ミスター・ホルブルックの人物像を形成したとも言える。ギaskellは詩を書いていた時期もあり、詩の研究を行うこともあった。彼女の詩作は小説を執筆する以前に限られており、現在確認されている詩は3篇にすぎないが、詩作の中心は常に自己あるいは対象となる人物の内面洞察にあり、<sup>2</sup>これは彼女が詩を読む際にも重要な要素であったのではないかと推測される。『クランフォード』においてミスター・ホルブルックはテニス詩集の書評が出るとすぐに『ブラックウッズ』誌を注文した(35-6)テニス愛読者として描かれているが、この雑誌はギaskellにとっては馴染み深い文芸批評誌でもあった。作家としてデビューする以前に夫ウィリアムとの共作詩「貧しい人々のいる風景」(“Sketches among the Poor. No. I”, 1837)が掲載されただけでなく、その後も何度か短編小説を投稿していたことを彼女はジョン・ブラックウッド宛の書簡のなかで明らかにしている(Letters 533)。ギaskellは『ブラックウッズ』誌のテニス詩集に関する書評を当然ながら読んでいたであろう。<sup>3</sup>

さて、ミスター・ホルブルックにとってテニスの詩の朗読は、積年の悲嘆の吐露であり、理解を求める内面告白であると同時に真摯な愛の告白であった。よって、詩の朗読を終えてミス・マティが御座なりの感想を述べたとき、彼が



当惑したのはもっともである。オックスフォード版の注も記しているように、ミス・マティはミスター・ホルブルックが朗読した詩と自分たちの恋愛との関連性には気付いておらず、「ジョンソン博士の美しい詩のように美しい」(36) という賛辞は、彼女の咄嗟の思い付きにすぎない (Birch 204)。ミスター・ホルブルックはミス・マティの返答に満足できずにいるが、実のところ彼の方も詩の朗読に夢中で相手が『ロックスリー・ホール』を聞いていなかったことに気付いてさえない。ミスター・ホルブルックが時折見せる年齢不相応の熱意や一方的な思い込みによる言動は困惑と滑稽の対象であり、語り手メアリはしばしば彼をドン・キホーテに喩えて揶揄している。

彼は数ヶ月後、農家の重要な行事である収穫のための干し草刈りを終えるとミス・マティを訪問する。目的は明らかに『ロックスリー・ホール』に対するミス・マティの返答である。しかし、結婚に反対した父親も姉もすでに亡くなっているにもかかわらず、恋人から望むべく返答は得られず、彼はその場を立ち去るほかない。突然、彼はパリに行くと言い、ミス・マティに詩集『ロックスリー・ホール』を手渡し、若い頃のように「マティ」と呼んで別れを告げる。故郷ウッドリーを離れるミスター・ホルブルックの姿はロックスリー・ホールを出ていく若者の姿と二重写しになる。彼は帰国後、読書の意欲さえ失い、亡くなってしまう。

このようにミスター・ホルブルックという人物像はギヤスケルの母方の祖父、および『ロックスリー・ホール』の主人公から形成されている。だが、テニス愛読者であるという側面に焦点を当てると、さらにもう一人興味深い人物が存在することを指摘したい。1849年8月、ギヤスケルは友人ジョン・フォスター宛の書簡でテニス愛読者である作家サミュエル・バンフォードについて書いているが、そこに記されているバンフォードの容姿や言動がミスター・ホルブルックに大きく重なるからである。この書簡においてギヤスケルは貧しくて詩集を入手できないバンフォードのためにテニスから詩集を渡してもらえないだろうかとフォスターに頼んでいるのだが、バンフォードは70歳近くの高いやせ型の屈強な男であり、心からのテニス崇拜者で、その音楽性と洗練された思想に喜びを覚えてテニスの詩を唱えていると記されている。さらに、彼は人が自分の話を聞きたがるかどうかなど気にしないこと、過去 (バンフォードの場合、亡くなった子が生きていた頃) を悲しく想うとき、テニスの詩を繰り返して自分を落ち着かせていること等が記されている (Letters 50)。このようなバンフォードの姿はミスター・ホルブルックを彷彿させる。テニスの『ロックスリー・ホール』はミスター・ホルブルックの内面洞察にきわめて有効であり登場人物に深みを与えているが、テニス崇拜者のサミュエル・バンフォードもまたミスター・ホルブルックの人物像形成に一役買っており、人物

描写に効果的に生かされていると言ってよいだろう。ギヤスケル小説の真実味は、このような登場人物に対する内面洞察と写実主義に基づく人間観察から生まれていることが理解できる。

なお、ギヤスケルのテニス評語はミスター・ホルブルックが語るテニス称赞—類まれな観察眼と的確な自然描写—とほぼ同一であると考えてよいだろう。また、登場人物の人物像を『ロックスリー・ホール』を通して形成したことを考えれば、自己を否定された若者の内面洞察（自己省察）と心の懊悩を赤裸々に告白するテニスの端正にして強力な表現力に大いに感じ入る部分があったに違いないと思われる。少なくともギヤスケルがテニスの詩を肯定的に評価していたことは、1850年8月、友人シャーロット・フルードに宛てた書簡に明らかである。その年の夏、ギヤスケルはシャーロット・ブロンテに出会い、湖水地方ヴィンダミアのレディ・シャトルワースの邸宅で話す機会を得たため、内容はその様子を伝えるものであるが、ギヤスケルはシャーロット・ブロンテに好意を抱いたものの二人の間には多くの事柄で意見の相違があるとして、その一つにシャーロット・ブロンテが「テニスには耐えられない」と述べたことを記している（*Letters* 78）。

『クランフォード』の第一章ではディケンズの『ピックウィック・ペーパーズ』（*The Pickwick Papers*, 1836-37）を愛読するブラウン大尉とサミュエル・ジョンソンを称赞するミス・デボラとの文学談義が展開されるが、第二章でブラウン大尉は鉄道事故により死んでしまう。第三章ではミス・マティの昔の恋人としてヨーマンのミスター・ホルブルックが登場するが、第四章で彼はテニスを絶賛して『ロックスリー・ホール』を朗読した後、パリへ旅立ち、やはり死んでしまう。この小説では「ともかく、紳士はクランフォードからいなくなる」(3)と冒頭で宣言している通り、真のジェントルマンと思いき男性は登場して程なく物語から消えていく運命にある。この二人はどちらも人生の悲哀を併せ持つが、心の支えとなる愛読書とともにあることで日々の生をより深く捉え、充実させていたように見える。ブラウン大尉とミスター・ホルブルック—小説（ディケンズ）と詩（テニス）—両者の人物像と愛読書の描き方は小説構成の点で興味深い対照をなしており、ギヤスケルの執筆意図がいかほどであったかは不明だが、この小説構成と後世に名を残す同時代の偉大な作家と詩人の作品を軽妙かつ印象深く紹介するギヤスケルの手腕は見事であると言ってよいのではないだろうか。

## IV ヨーマンの社会的地位と矜持

『クランフォード』においてミスター・ホルブルックは身分違いを理由にミス・マティの家族から求婚を拒否された訳だが、ミス・マティが属する牧師一家とヨーマンは当時のイギリスの社会階層においてどれほどの差異があったのだろうか。まず考えられる最も大きな差異は、教区牧師 (“rector”) 一家が紳士階級と称されるジェントリ (“gentry”) に属するのに対して、ヨーマン (“yeoman”) はノンジェントリ (“non-gentry”) に属していたという点である。中世以降、ジェントリは王侯貴族より下位の階層に位置し、「准男爵」 (“Baronet”)、「騎士」 (“Knight”)、「郷紳 (大地主)」 (“Esquire”)、「聖職者」 (“Clergyman”) および「ジェントルマン」 (“gentleman”) の身分で構成されており、ジェントルマンには将校、医師、弁護士、牧師などの専門職 (プロフェッショナル) が含まれていた。このジェントリ層のさらに下位に位置するのがノンジェントリである。

ヨーマンは小地主あるいは独立自営農民と翻訳される農民で、自分の土地を所有し、自分で農業を行う身分であり職業でもある。イギリスの農村社会における序列では、ヨーマンは大地主を指すスクワイア (“squire”) と土地を持たない農夫 (“peasant”もしくは“farm-servant”) の中間に位置する。スクワイアとヨーマンはともに地主であるが、スクワイアが広大な土地財産による収入で暮らし、自分では農作業を行わず州長官、治安判事などで地方政治を担ったり下院議員になったりしてエスクワイアという称号を持ち、ジェントリに属したのに対して、ヨーマンは中産階級として家内産業に従事していたため階級としては大きな差異があった。つまり、牧師たるジェンキンズ一家は、身分が下で結婚後には農作業を行う可能性のあるノンジェントリに娘ミス・マティを嫁がせることは容認できなかったということになる。

18世紀になるとヨーマンは天災や困い込みなどの社会事情により貧困層に没落することも多かったが、一方で、裕福なヨーマンのなかにはエスクワイアや資本家となってジェントリ層に移行する者もいた。これは同じジェントリの准男爵や騎士とは異なり、エスクワイアやジェントルマンという地位身分が王室によって授与される称号によるものではなかったことが原因の一つであったと考えられている。<sup>4</sup> 19世紀初頭のヴィクトリア朝に至っても事情は同じで、スクワイアとヨーマンの確たる定義づけや認定基準は存在していなかったようである。『クランフォード』第三章でミスター・ホルブルックの遠縁にあたるミス・ポールは彼がヨーマンである理由を次のように述べている。

... his property was not large enough to entitle him to rank higher than a

yeoman; or rather, with something of the “pride which apes humility,” he had refused to push himself on, as so many of his class had done, into the ranks of the squires. He would not allow himself to be called Thomas Holbrook, *Esq.*; he even sent back letters with this address, telling the post-mistress at Cranford that his name was *Mr.* Thomas Holbrook, yeoman. (30)

ミスター・ホルブルックは「謙遜をよそおう自尊心」(“pride which apes humility”)からヨーマンと名乗ったのであり、エスクワイアの称号付きで呼ばれることを認めようとはしなかったと述べられている点に注目したい。ミスター・ホルブルックにはエスクワイアの称号を得るのに申し分ない土地や財産がなかったことは事実だが、同程度の多くの人たちがスクワイア(大地主)の階層に移った中で、彼はこれを善しとしなかったとミス・ポールは説明している。実際、このような矜持を持ったヨーマンは当時少なくなかったようである。ダヴィドフとホールは19世紀中葉のイギリスのヨーマンについて次のように述べている。

十分な資源を持っていた裕福な農業経営者たちが、かならずしもみなジェントリ風の生活を望んだわけではない…農業経営者は長い歴史を持つ生活様式を代表する存在であり、彼らの飾り気のなさや慎ましさにたいする郷愁から、彼らの上位に位置する階層も下位に位置する階層もともに苦々しさを覚えたのである。(ダヴィドフ、ホール 197)

この時代のヨーマンは「馬、犬、牧草地や畑の世界と結びついた、素朴できわめて男性的な徳の様式」を持つ存在であり、近代農業における教育の必要から識字と計算能力を重視して私立学校を設立する者や、家庭に小さな図書室を持つ家もあった。彼らは「農村部の教区にやってきた聖職者たちよりも古株」で、収入も多く影響力もあった(ダヴィドフ、ホール 196-7)。このように述べられているヨーマンの生活態度は『克蘭フォード』に描かれるミスター・ホルブルックの暮らしぶりに一致する。彼は蔵書を有し、実務も行っていた。ミス・ポールの言葉どおり、ミスター・ホルブルックは「自尊心」からジェントリへの同化を固辞したのであろう。

一方で、聖職者、法律家、医師のような「知識人」(“the Men of Letters”)はジェントリのメンバーであるという考えは17世紀からあったが(金屋 169)、聖職者にも階層はあり、教区牧師の立場は19世紀中葉になると上流中産階級に属していた(ダヴィドフ、ホール 173)。これらの点を考えると、教区牧師であるジェ

ンキンズ家がミスター・ホルブルックとの縁組を拒否した理由は判然としなくなる。ミスター・ホルブルックも結婚が破談になるとは考えていなかったため、求婚したのであろう。語り手メアリも釈然とせず、ミス・ポールに理由を訊ねている。ミス・ポールはミス・マティが結婚に至らなかった理由について、彼女が牧師の娘であることに加えて「ジェンキンズ家はピーター・アーリー卿と縁続きでしょう、ミス・ジェンキンズはそれを重く考えていたから」(30)と語っている。つまりジェンキンズ家が娘マティとミスター・ホルブルックの結婚に反対した理由は、厳密に言えば一家の階層意識（ジェントリへの帰属意識）と姉ミス・デボラの歪んだプライドが原因だったということになる。ミス・マティに再会した時、ミスター・ホルブルックはデボラへのお悔やみの言葉として「お気の毒なお姉さん！—でもまあ、私たちはみな過ちをもっていますから」(31)と言葉少なに述べている。彼にとってこれは批判というよりデボラの誤った判断が自分たちを不幸にしたという事実を述べているにすぎないのであろう。

町で昔の恋人と思いがけず再会した後、ミス・マティは部屋に閉じこもり、お茶の時間まで泣き続ける。彼女の心中を察することは読者に委ねられている。家族を信頼し、自ら考えることはせずに生きてきた彼女がこの時点で自己責任を自覚していたとは考えにくい。彼女はデボラ亡き後、一人になっても自分で考え決断することができない。生活の規律や判断基準をどこに置いてよいのかわからず、家事も整理も女中のしつてもできないと嘆いている。しかし、ウッドリーを訪問して以降、そしてミスター・ホルブルックがパリへ旅立ち、病の床に就く頃になって、彼女は考え始める。彼の訃報を聞いた夜、彼女は女中マーサに「私が若い人たちの心を悲しませるようなことを神はお許しにならないでしょう」(41)と言って、男女交際を許す決断をする。ミス・マティの悲哀は決して彼女の口から洩れることはなく、彼女は家族を責めることもない。恋人の死は取り返しのない過ちとして彼女の胸に永遠に秘められたまま、彼女は未亡人の帽子を注文する。小説は若いマーサの仰天発言によって絶妙に喜劇性を取り戻すが、語り手はミス・マティに寄り添い、マティは『クランフォード』の真の主人公となって悩みや人生の悲哀を読者と分かち合う存在になっていく。

ヴィクトリア朝時代の女性にとって、結婚は身分の流動性をもたらす要因であり、伴侶の選択は人生を支配する問題であった。殊に立場ある女性にとって結婚は唯一の生きる道であり、相応の男性に求婚されない場合は父親の身分で独身となるが、独身の場合はきわめて不安定な将来が待っていた。実際、『クランフォード』の独身女性たちには満ち足りた結婚生活とは無縁の心細い生活を強いられる悲哀が漂っている。しかし、彼女たちは何とか現実に折り合いをつ

け、互助精神を持ち、規律正しく日々楽しみを見つけて生きている。この逞しさ—これが「アマゾンズ」(“the Amazons”) (3) の精神なのだろうか。女性も一人の人間として自助の精神を持ち、つましく注意深く、善意で生きるとき、男性に依存することを考えなくとも幸福は得られるとギヤスケルは考えていたのかもしれない。

#### 注

- 1 ギヤスケルの青年期の読書歴は書簡によるが、ユーグロウの *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*, Chapter 2 に詳細にまとめられている。
- 2 ギヤスケルの詩 (“The Sketches among the Poor. No. 1,” “On Visiting the Grave of My Stillborn Little Girl,” “Night Fancies”) の分析は、長浜麻里子「貧しい人々のいる風景」、「死産の女兒の墓に詣でて」、「夜の嘆き」を参照。
- 3 オックスフォード版テキストの注で、バーチは『ブラックウッズ』誌の1849年4月号に掲載された「テニスン詩集」の書評はあまり好意的なものではなかったため、ギヤスケルの頭にあったのは別の書評だったかもしれないと記している。
- 4 イギリスの階層構造については、スチュアート朝から部分的に19、20世紀の歴史的経緯まで解説されている金屋平三「17世紀イングランドの階層構造」を参照。

#### 引用文献

- Evans, Ifor. “English Poetry from Tennyson.” *A Short History of English Literature*. Penguin, 1986, pp. 96-100.
- Gaskell, Elizabeth. *Cranford*. Edited by Elizabeth Porges Watson. With an Introduction and Notes by Dinah Birch. Oxford UP, 2011.
- . *The Letter of Mrs Gaskell*. Edited by J.A.V. Chapple and Arthur Pollard, Manchester UP, 1997.
- Ibuki, Chise. Notes. *Cranford* by Elizabeth Gaskell, Edited by Chise Ibuki. Kenkyusya, 1951.
- Tennyson, Alfred. ‘Locksley Hall.’ *Tennyson’s Poetry: Authoritative Texts; Juvenilia and Early Responses; Criticism*. Selected and edited by Robert W. Hill Jr. Norton, 1971, pp. 94-100
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*, Faber and Faber, 1999.
- L.ダヴィドフ, C. ホール 『家族の命運：イングランド中産階級の男と女 1780-1850』

- 山口みどり, 梅垣千尋, 長谷川貴彦訳, 名古屋大学出版, 2019年, 196-7頁.
- 海老池俊二「ヴィクトリア時代—実写の文学」『世界の文学史4：イギリスの文学』  
平井正穂, 海老池俊二著, 明治書院, 1967年, 205-7頁.
- 金屋平三「17世紀イングランドの階層構造」『奈良大学紀要29号』2001年, 163-177頁.
- 長浜麻里子「貧しい人々のいる風景」、「死産の女兒の墓に詣でて」、「夜の嘆き」『ギヤスケル作品小事典』多比羅真理子編著, 開文社, 2019年, 100-13頁.
- 西前美巳「ロックスレー・ホール ‘Locksley Hall’—自伝的要素の断片が奏でる青春譜」  
『テニスの言語芸術』開文社, 2000年, 102-40頁.